

【創作】

塀の短編集 ①

増田辰良

創作

塀の短編集 ①

増田辰良

目次

1. 塀と夢
付記
2. 消えたブロック塀

1. 塀と夢

—— この物語は私が大学二年生のときに、友人から聞かされたものです。物語は友人の叔父さんの奇談であった。叔父さんの名前を公表するわけにはいかない。ここではM氏としておこう。M氏は著名な哲学者であるとともに、幻想小説の書き手でもあった。

ずい分と時間も過ぎたので、うる覚えの部分もあるが、趣旨だけはなるべく押さえて、これからその物語をしよう。まずは話の順序として、M氏が二階の窓から道路を見下ろしている光景を目に浮かべてもらいたい。

晴れの日も、雨の日も、風の日も、雪の日も、ほぼ同じ時刻に見覚えのある人間たちが通り過ぎて行く。変わるのは季節に合わせた服装くらい。誰もが、時計という足枷むかを引きずり、催眠術をかけられたよ

うに動いて行く。まるで時間の奴隷のよう。

道路の左側からやけに下腹の突き出た中年の男（実名は公表できない。Yとしておく）が近づいてきた。このY、結婚するまではM氏の隣家に住んでいたようだ。今は、この町内の別の番地に一戸を構えているそうだ。毎日、この道路を通勤に使っているみたいだ。「……ようだ。……そうだ。……みたいだ」と言うのは、これまでに直接、言葉を交わしたことがなく、噂でしか知らないからである。

「来たかあ」

インターフォンが鳴る前に、M氏は階下へ降り、庭先へ出た。

人間は、塀や壁が無ければ、造りたくなるし、造れば、それよりも高く強固な塀や壁を互いの心の中に築いてしまうものらしい。

M氏家と隣家との境界線には高さ八十センチメートル、長さ二十メートルほどのブロック塀が建っている。これはM氏が住む前に造られ、両家で共同所有している。

隣家の老夫婦は他界し、その息子で相続人であるYが交渉にやって来たのだ。土地を売り払うのに共同所有では障害になるので、この際、

キーワード…夢、ブロック塀、幻想小説

塀を取り壊そう、と。

ぞんざいな挨拶の後、Yは、

「親父おやじの代に費用を折半して両家で造ったものだが、共同所有を証明する書面はない（そんな事情は知っているだろ）」

と、横柄な物言いで切り出してきた。

M氏は目尻に笑みを浮かべ、穏やかに事実を話した。

「権利意識の弱い暢気な、いい時代だったのですね。この土地を買うとき、共同で造ったので、塀は両家の境界線上にある、と前の持ち主から聞かされましたよ」

すると、Yは口元を緩め、ニッと笑ってから、

「ですから、この際、壊してしまえば、すっきりしますよ」

早く片付けてしまいたいという本心が聞こえた。

M氏は、そもそも壊す意思は毛頭なく、

「共同所有していても、書面がなくても、これまでトラブルことなくやってきたじゃないですか。なまじっか、書面を作るから、それに心が縛られて、互いの心に壁ができるのですよ。土地を売る条件に共同所有を維持するという一文を入れてもいいんじゃないですか。私はそれでも次に住むであろう方たちと、うまくやっていきますよ。世の中、個々人の生活を重視する風潮がありますが、むしろ『遠くの親戚よりも近くの他人』という時代ですからね」

と、こう提案してみた。

出鼻を挫かれたYはサッと顔色を変え、うさんくさそうに、

「それでは買い手がつかない、と不動産屋に言われまして……」

一呼吸おいて、言い難そうに、また口を開いた。

「死んだ親父によると、お宅の前の住人が庭木の枯れ葉が互いの屋敷に入らないようにしようと、なん、なん……、なんべん、をつけ

て……」

と、言い淀んだ。

「んんっ？ 難癖なんびくです」

M氏は真顔で教えた。

「そう、その難癖をつけてきたので、共同で造ることにしたそうです。そう聞かされてきました。元はと言えば……」

M氏はYの話を腰を折り、

「造った経緯は問題じゃありません。私の知り得ない事情があったのでしょうか。現に、ここに建っていて四十数年間、両家の住人たちの生活や道路を通る人間たちを観察してきたブロック塀ですよ」

と、一気に話した。

Yは眉間にギューと皺を寄せ、怪訝な表情を返してきた。

M氏は、目尻に笑みを浮かべ、また口を開いた。

「塀の向こうには夢があります。なので、塀は開くもの、越えるものですよ。壊すものじゃない」

その声は愉しそうで、弾んでいた。

Yは一瞬、目付きを陰しくしたが、すぐに無理やり微笑を浮かべて言った。

「いいえ、壊して前へ進むものですよ。塀は壊されるべきものですよ。それが運命ですよ」

この言い草にM氏は顔を曇らせ、Yを凝視して少し強く言い返した。「それは人間のエゴというものですよ。『ベルリンの壁』だって、そうでしょ。壊されるべきものを、なぜ造るのですか？ 塀の立場からどうなんですかね？」

「……？」

Yは顎を引いて、不安気に顔を強張らせた。

M氏は助け舟を出してみた。

「壊すのは簡単です。重機を使えば、三時間もあれば、きれいさっぱりと無くなるでしょうけど……」

この言葉に不安が払拭されたのか、Yは安堵の眼差しに戻った。

「それでいいのですかね？」

M氏がさらにそう問いかけると、Yはまた顔をしかめた。

「あなた、この道路を歩いて駅へ行ってますよね」

確認したくて、詰問する口調で訊いてみた。

(なぜ、知っているんだ、という顔で) Yは、

「はっ、はい。毎朝、七時三十分にかを出て、四十五分の快速に乗っています。夕方は七時頃に、この前を通ります」

素直な答えが返ってきた。

「でしょ」と語気を強め、M氏はまたYの目を睨みつけ、「毎日毎日、定刻に起床し、朝食を摂り、家を出て、ほぼ同じ時刻に、この塀の前を駅に向かい、定刻の電車に乗って、職場では仕事の成果があらうとなかろうと……、また同じようにこの塀の前を通って帰宅するんだあ。そんなことを決まった手順でこなすあなたは同じ日を繰り返すために生きているかのようだ。ただただ、時間に縛られて……。それって意思を持たない無生物と同じですよね」

M氏の瞳に宿った何かにYはまた不安をそそられたようで、

「人間と物とを同じ天秤に掛けるなんて、それはちょっといかなるものか……」

両目を見開いて、答えた。

イライラッと湧き上がってくる不快感を押し込めて、M氏は、立

てた右手の人差し指を唇に当て、

「シー、シー。塀が聞いてますよ。それ、『壁に、塀に耳あり……』って

言うでしょ」

Yはポカーンとマヌケ面をした。

それにかまわず、M氏は静かに、

「この塀の天辺の向こう端を見てごらんさい」

Yを誘導した。

「どうです？ 端っこに大きな扉……、夢の扉が見えるでしょ」

Yは、ちらっとM氏の顔を盗み見てから、(こいつはアホか、と言

いたげに) 首を大きく右に左に傾げ、形勢を逆転させようと、

「はー？ 灰色をした単なる塀しか見えないです。夢？ 扉なんて見えません。ふん」

と、小バカにして聞かせるよう鼻を鳴らした。

「それが間違いなのです！」

M氏は思わず、大きな声を上げていた。

「夢を抱かないから……。夢の扉さえ見えないとは……」

と、侮蔑するように続けた。

Yはギョッと目を見張ったまま、後ずさりした。

その後、重い沈黙の空気が降ってきた。

その沈黙を破ろうと、M氏は「んんっ」咳払いをしてから、憐憫の

情を含んだ目をYに向けて、淡々と独白した。

「あなたはこれまでに夢や望みの一片すらも叶えてくれない壁にぶつ

かったことがないのですか？ 精神の自立に疑問を抱く青臭い時代

に……私はもがき苦しみました。己の存在理由とは？ 己が何者なの

か？ 何者になれるのか？ 思考は停止してしまいましたよ。目の前

に突然、エベレストの急峻が立ちはだかったのですから……」

ここでM氏は言葉を切り、Yの顔を窺った。疑心のこもった視線を

返されたが、それに怯むことなく、続けた。

「苦悶の末、友人たちに問いました。それなりの言葉が耳に届いたただけでしたが。師と仰ぐ方たちのドアもノックしましたよ。その中の一人が最善のヒントをくれました。『誰かが世の中を変えるまで待っていても何も変わらない。奴隷のような精神を変えるのは自分自身だ』これは悶々としたスモッグで満杯だった私の頭の中の栓を引き抜く言葉でした。『壁に直面していると意識したならば、その壁は限界ではなく、その壁を足がかりとして未知の世界へ踏み込んで行く。そもそも壁というものはもっと先へという気持ち、夢がなければ現れないことなのだ』と。……そう、壁は夢の扉だったのですよ（筆者―塀・壁の隠語は夢）」

この独白も、Yには与太話にし過ぎなかつたようだ。それがどうした（このアホが）という視線で、

「そんな扉があろうと無かろうと、結局、この塀は取り壊すべきですよ」と、同意を求める意図をありありと込めて早口で言った。

「取り壊す!! 塀は泣き叫んでますよ。その声が聞こえませんか!」
M氏の自律神経はぶち切れそうだった。なんとか気持ちを静め、まだ理解が追いついていない相手に、さらに嘔んで含めるようゆっくりと話した。

「……あなた、この塀をじゃけんに扱ってきたでしょ。子どもの頃、落書きをしたり、野球のボールをぶついたり、上に登って歩いたり、と。誰にも、あるいはどんな物にも我慢できないことが一つや二つあります。その我慢できないことは必要以上に酷使されることと、じゃけんに扱われることですよ。たとえ、犬や猫、道路や車であれ、酷使され、じゃけんに扱われることほど屈辱はありません。この塀は境界を示すことや、庭木の枯れ葉が互いの庭に落ちるのを防いできただけでなく、北風が運んでくる雪から家屋を守る役割もしてきたのですよ。境界と

(四)

しての役割以上のことをさせられてきました。なのに、それに見合う名譽や慰めの言葉一つも掛けてもらえない。その上、壊してしまおうなんて……正気の沙汰とも思えません」

Yは（こいつは救いようのないアホだ）呆気に取られた表情をしたが、すぐに口元をニッと歪め、間を取ろうと、再び、ブロック塀のはるか端っこに目をやった。

「単なる塀にしか見えない! その先は青い、青い、空だ!」と声を荒げ、「そんなことは気違いじみている。塀は境界を示すただけに造られるものだから。いつだってそうでしょ。へっへっへっ」と、あからさまにあざ笑った。

それでもM氏は身じろぎ一つせず、

「こんなに説明しても、なぜそんなに塀をじゃけんに扱うのですか? 扱えるのですか?」

と、詰め寄った。

Yも負けてはいなかった。

「なぜなら、塀は塀でしかないからですよ。来る日も来る日も、塀は黙ってここに建ったままです。明日も明後日も……」

突然、Yの言葉が途切れた。

というのもじゃけんにされてきた塀に代わって、その怒りをぶつけるよう、

「じゃあ、あなたは!!」

と、M氏がすさまじい形相で声を張り上げたからだ。

「塀があなたのことをどう考えているのか? どう見ている、と思うのですか? 塀はあなたを生き物だと考えているでしょうか? 血や涙のある生き物と見ているでしょうか? あなた自身に生きている実感はありますか? 存在価値は? 来る日も来る日も、年がら年中、

決められた時刻に、この道路を歩いて自宅と職場とを往き復するだけの……無生物も同然でしょ。だから、だから、私はそんな物たちにも敬意を払ってあげたいのです。ましてや、この塀は必要とされて、人間によって造られたものですよ」

そう言い切るとM氏は、ブロック塀に軽く会釈をしてから、その場を離れた。

——これが物語の全貌です。あの頃、私は学問で生計を立てていくと決心したものの、先人たちの成果を学ぶたびに己の潜在能力の浅薄さを思い、心はダンブカーに轢かれた蛙のように潰れていた。そう、越えるべき巨大な壁にぶち当たっていた。

この物語を拝聴後、その壁は一層高く、かつ強固になり、私の向学心は木っ端微塵に砕け散った。というのも、M氏のぬけぬけとした、ユーモアのある、あまりにも無邪気で残酷じみた奇談に畏怖を感じたからである。専門家とは、こんなにもふてぶてしく病的なのか？ と。ゆえに、脳ミソの隅っこにある壁から離れず、老年になった今でも、ブロック塀が目に入ると、しばしばフラッシュバックしてくるので

(了)

付記。執筆に際し、次の文献を参考にしました。

G・K・チェスタトン「怒りの歩道―悪夢」T・スタージョン、G・K・チェスタトン他(2017)(中村融編『夜の夢見の川』創元推理文庫、271頁280頁所収。

ヤマザキマリ(2022)『壁とともに生きる わたしと「安部公房」』NHK出版新書。

以下は私見です。

発想…「塀・壁の隠語は夢」から得ました。
モチーフ…夢も無く、己の存在価値を意識することなく、時間の奴隷となつて生きている人間は無生物も同然だ。

テーマ…アニミズム感(人造物にも魂がある。物を大切にすることを伝えたい。でも、読後はモヤモヤ感を残したい。

執筆の動機は「M氏のぬけぬけとした、ユーモアのある、あまりにも無邪気で残酷染みた奇談」に発しています。が、その前の読書体験として、あらゆる不条理、予定調和の崩壊と向き合った安部公房(2018)『壁』(新潮文庫)の影響を強く受けています。

たくさんの小説を読むたびに思うことがあります。明確な結論へ向かって、読者を飽きさせないよう必ず幾つかのワナ(虚構)が仕掛けられている、と。しかしちょっと脇を見ると、結論のない小説もあります。読んだ後に、モヤモヤした気持ちに囚われ、論理では割り切れない何か釈然としない(奇妙な味)(江戸川乱歩の造語です)が残り、時空を超えていつまでも脳ミソの壁に隠れている善さが。結論をいか様にも導くことができる類の小説です。結論の解釈を読者に委ねる、と言えば理解し易いかもしれません。

これは小説に限りません。幼児が手にする絵本、おとき話にも潜むモヤモヤ感と同じです。幼児(大人も)は同じ絵本を何度読んでも飽きません。それは理解力の未熟さによるのではなく、いか様にも読み取れるモヤモヤ感を愉しんでいるからでしょう。この作品(塀と夢)はそんなモヤモヤ感を狙って(狙ったつもりで?)書いてみました。

もう一つ、伝えたいことがあります。それはSF(サイエンスフィクション・空想科学)小説との境界です。SF小説とは、どれだけ科学的(サイエンス)考証を凝らし、論理的にまことしやかに書かれていても、どこかに救いようのないバカな要素(フィクション)が入っています。読者は、そのバカさ加減に魅き付けられるのですが。本稿も哲学者(M氏)という性癖、論理を弄び過ぎたおかしさ(専門バカ)を描いたつもりです。

小説の描き方は一色である必然はありません。むしろ一色に染まることを嫌う者が革新的な小説を描いてきたのだ、と思います。また読書好きであれば、そんな小説を読み込む(読まず嫌いにならず)姿勢で挑むべきだ、と思います。次の作品も、お読みください。

2. 消えたブロック塀

——これは本当にあった話です。誰の仕業なのかは知りませんが、ブロック塀が消えたのです。聞きたいですか？　じゃあ、小説ふうにお話しましょう。

老夫婦がリビングから、庭先を眺めている。そこには隣家との境にブロック塀がある。夫が女房に声をかける。

「隣は売れたようだ。庭木をみんな引き抜いて……」

「この前、若い親子連れが更地を見に来ていましたよ」

「ブロック塀の件で、札幌の不動産屋が交渉に来たし」

「交渉ですか？」

「うん。このブロック塀は、ここの前の住人が隣家と費用を折半して造ったそうだ。この土地を買うときに所有者の婆さんから聞かされた」

「共同で造ったのね」

「うん。それはいいんだが、塀は両家の境界線上に建っているんだ」

「費用を折半したから」

「うん」

「でも、境界線上だと、将来、うちが売るときにややこしくならないかしら？」

「なりうる。なので、隣の年寄り夫婦が亡くなって、相続した息子から土地を買った不動産屋が、うちに所有権と処分権を設定する契約書を作成して、うちの物にしる、と押し付けてきたんだ。新たに住む人は若い家族持ちだそうだから……俺たちも年寄りだし、いつお世話になるかも知れんので、探め事にしないで、この際、うちの物にして、

自然と壊れるまでこのままにしておこうと思うんだ。俺たちの死んだ後に子供たちがここを処分するとき、どうするか……は彼らに任せればいいし。今、探めれば、裁判沙汰にもなりうる。近所付き合いで、探めたくはないだろ？」

「そうだったの。子供たちは東京に住んでいるから、ここへは帰ってこないでしょうからねえ。好きなように処分するでしょ。でも、塀は今、無くなればもっといいわけよね」

「そりゃそうだけど。この前の（北海道胆振東部）地震でも壊れなかったし、まだ持ちそうだからあえて壊すのも、塀が可哀相で」

「可哀相？」

「だって、四十数年、ここにあって、前の住人や俺たちの生活を見てきた塀だぞ」

「まあ、確かに、そうですね。うちの物にするのはいいけど、無くなれば、それに越したことはないでしょ。すっきりするじゃない」

女房の声は懇願しているふうだった。

「そっ、そうかあ。……ドラマを作れっかあ？」

私はとんでもない課題を与えられたという声を漏らすしかなかった。

不動産屋の営業マンがやってきた。

「あなた、この塀に手を乗せてごらんさい」

営業マンは、何をさせるのだという訝しげな顔をして、いやいや右手を塀の上に乗せた。

「どうです？　塀は温かいでしょ」

「……？」

「この塀は、私がここに住み始める前の二十数年前に造られたものですよ。どうです？　手、温かくなってきたでしょ」

「……？」

「塀も生きてますから、息をしますからね。塀の命の温もりがあなたにも伝わっているはずですよ。この塀、重機を使えば三時間もあれば、壊せますよ。四十数年もこの風景とともに生きてきたものを人間は、いとも簡単に壊してしまうことができます。……このモミジやライラックの木だって、前の住人から受け継いだもので、生まれて五十年の歳月をここで過ごしてきたのですよ。こんなに太いけど、五分もあれば切り倒すことができますがね。木も生きてますから。切り倒したり、引き抜かなくても、その命を次に住む人間にも引き継ぐよう助言をするのも不動産屋の務めじゃないですか。土地や木々があって、あなたたちの商売も成りたっているのですよ。(隣の更地を見て) ここにもたくさん庭木があったでしょ。みんな引き抜いて、更地にして……。木々の泣き叫ぶ声が聞こえませんか。心が痛みませんか、ねえ。自然を疎かにしてきたと思いませんか。これって、変でしょ。罪深いことですよ」

「……？」

「あなた方、不動産屋は物件を買って、売って、稼いで、はい、終わり、という商売しかしないようですが……」

私が、そう話すと営業マンは苦虫を嘔み潰したような表情をした。私の小言は凶星だったのだろう。

「物にも魂があるんですよ。それを大事にする心があれば、人間関係もよくなるのですがねえ。塀を造るから、人の心に壁が作られるんです。人は争いごとの元になるものを自分で造って置いて、その後始末を別の人間にさせる。無責任なものです。造った物には責任を持ってほしいですよ。……でも、この塀、意外なことで、役に立つこともあるんですよ。解かりますか？ まだ、お若くて人生経験が浅いでしょ

うから、無理かな？」

「……？」

「この塀は、この両家の住人だけでなく、この道を通るあらゆる人間の表情を見て、今に至っています。もっと、大事に大切に扱ってやってほしいですよ。塀から、その叫び声が聞こえるでしょ。……ああ、もう手を下ろしてもいいですよ」

「……？」

営業マンは下ろした右手を左手でパチパチを掃った。

「いいですか？ 今夜から、あなたの見る夢の中に、この塀が出てきてもじゃけんに扱ってはいけませんよ」

「おっしゃっている意味が分かりませんが」

営業マンはむっとした顔のまま、ようやく言葉を口にした。

「簡単です。この塀の夢を見ないことです。決して、決して、この塀の夢を見ないように。夢を見てはいけませんよ。この塀の」

そう言うてから、私は小脇に挟んでいたホルダーを営業マンに差し出した。

「じゃあ、書類は確かにお渡ししましたよ。後は、よろしくお願います」

営業マンは不可解な顔つきのまま、受け取り、黙って会釈をしてから黒色のワンボックス・カーに乗り込み、勢いよく発進させた。変な宗教を吹き込まれたような嫌な気分で会社へと急いだ。車窓から目に写るブロック塀がやたらと気になった。

数ヵ月後の日曜日。私は前庭の隅にある三坪ほどの広さの畑で草取りをしていた。畑仕事は唯一の趣味である。

垣根の向こうの道路に黒色のワンボックス・カーが止まり、スーツ

姿で小太りの男が降りてきた。

「お久しぶりです。書類をお届けに参りました」

男はやけに愛想よく、私の背後から声をかけてきた。

さて、誰だたっけ？ 返事をしない私に男は、なおも声をかけてきた。

「小和不動産の者です。四月にブロック塀の所有権の件で書類を作成してもらった者ですが」

（ああ、あのときの不動産屋かあ）すっかり、その人相を忘れてしまっていた。書類を作成するのに何ヶ月かけてんだあ、そのうえアポなしかい、と余計な腹立ちを覚えた。

畑仕事という至福の時を邪魔されたくなくて、私は返事をせずに、また視線を土に落とし、草を抜き始めた。男は無視されたことに気づき、今度は丁寧な声をかけてきた。

「お仕事中、すみません。書類に目を通していただきたいのですが」

私は、なおもうんともすんとも応じなかった。

「お隣に住まわれる方からもご署名と押印をいただきまして、これで契約書が完備いたしましたものですから、お届けに……」

たまたらず、私は振り返り、不動産屋をキーツと睨みつけた。

不動産屋は目を見開き、後ずさりした。

私は、また視線を土に落とし、作業を続けた。

私は、自分のこの土地を三十数年前に買った。その際、元の所有者のお婆さんからは、このブロック塀は両家の境界線にあり、造るにあたってはその費用を折半したという説明を受けていた。両家での共同所有に関する契約書など作成していなかったようだ。このたび、問題を大きくしようと思えば、いくらでもできたが、そんな面倒は避けるのが得策と考え、不動産屋が家が家に所有権と処分権を設定した契約書に署名と押印し、この営業マンに持って帰らせた。後は隣家の更

(八)

地を買って住むであろう人物が、それを承諾するだけとなっていた。その署名と押印された契約書を営業マンは届けに来たのである。これで、このブロック塀は完璧にわが家の所有物になる。共同所有というのは明らかに、新たに住むであろう住人には嫌なことである。私もこの機会に所有権をはっきりさせておきたかったのだ。

この契約書、すんなり受け取ったのでは、おもしろ味がない。何かアイデアを得て、小説として書いてやろうという魂胆で、私は営業マンに接してみた。その現われが前述の意図した無視する態度であった。

私はようやく腰を上げ、契約書の入った袋と名刺を受け取った。契約書の内容を確認してから、また袋にしまった。営業マンの姓は鈴木であった。私は彼を道路側のブロック塀へと誘導してから声をかけた。

「ここ壊れてるでしょ。なぜだと思えますか？」

「さあ、劣化ですかね」

「よく見てください。二十メートルほどあるブロック塀のここだけですよ、壊れているのは。不思議じゃないですか」

「は〜」

「私の前の住人は年寄り夫婦で、資産家だったことはご存知ですか？」

「いいえ」

「へ〜。ご存知なかったのですか？」

私は、いかにも意外だという声音を返してから、続けた。

「三代にわたって、銀行に勤めていたそうです。ご主人は、みなさん支店長にまでなられたそうですよ。社会的には出世した立派な方々だったようです。でも、よくあるでしょ。世間には、立派すぎる親には放蕩息子ほうとうむすこが一人や二人はいるって。貯め込んだ資産額は苦勞の種と均衡するものなのです。世の中は、ほんとおもしろいです」

「ときどき聞きますね」

鈴木はやり場のない顔をし、どうでもよさそうな声で相槌を打った。「でしょ。そこですよ。鈴木さん。この話、聞きたいですか?」

「はっ、はい」

話の流れから同意するしかなかった。

「じゃ、話しましょう。私の前の年寄り夫婦も遺産として残る金が心配だったようです。二人いた息子の長男は生憎、吹雪の高速道路で多重追突事故に巻き込まれて、自分と妻の命を落としてしまったそうです。生き残ったのは、孫娘一人のみ。老夫婦はこの孫娘をたいそう大事に育てたそうです。もう一人の年の離れた次男坊はわがままに育ったせいでしょうかねえ、働くこともせず、老親のスネをかじってばかりだったようです。孫娘が年頃になると手を出しかねないほどのチンピラに成り下がっていたようです。そうこうしているうちにお婆さんが突然、脳溢血で倒れ、そのまま他界してしまっただけです。放蕩息子は葬儀にも帰らなかったそうです。どこでどう生きているのか、お爺さんも知るあてがなかったそうです。そんな息子に自分が死んだ後のことは託せませんよ。残る財産はすべて信頼できる孫娘に相続させることにしたそうです。当然でしょ。老後の面倒も見てくれたようです。遺言も書いて、揉め事が起こらないよう、すべての手続きをしておいたそうです。ところが、小説のようなドラマが始まります。分かります?」

私は鈴木の目をしっかり見て訊いた。

「いいえ」

鈴木はキョトンとした顔で答えた。

「放蕩息子がどこでどう聞きつけたのか、突然、舞い戻って来て、遺産を寄せと迫ってきたそうですよ。すったもんだの末にお爺さんは息子が一生かけても稼げないほどの金を与えて、親子の縁を切ったそ

うです。これも孫娘のためです。しかし、そんな息子です、もらった金を湯水のように使い尽くすことは目に見えていました。お爺さんは思案に思案を重ね、孫娘に言ったそうです。『現金をこの家屋敷のどこかへ隠そう。そしてお前が必要とするときがあれば、それを自由に使いなさい』と。銀行に預ければ、息子が嗅ぎつけて、遺産として寄せ、と脅されかねませんからね。

それからお爺さんと孫娘は隠し場所を話し合ったそうです。その結果、室内はダメ、屋敷内の地中に埋めるということに考えが及んだそうです。それ、よくあるでしょ。小学校の卒業式の日の子供たちが未来の自分へ宛てた手紙をカプセルに入れて校庭の木の下に埋めるといふ、あれですよ」

鈴木は、それがどうした、とでも言いたそうな顔をした。

私は続けた。

「ところが、これには大きな問題がありました。屋敷内であれば、家を壊して更地にするとき、ところかまわず、掘り起こすことができます。これでは息子に見つけられ、取られてしまいそうです。なにしろ、放蕩息子ですから、そんな悪知恵はいとも簡単に働くでしょ。お爺さんと孫娘は、また悩みました。事がことだけに、他人から知恵を借りるわけにはいきませんしね。

そこで、孫娘が思いついたのが、このブロック塀を造ることでした。四十数年前です。まだ隣人との温かい付き合いがありましたよ。この町内あげて花見をしていた時代ですから。このブロック塀を造る前はオンコの低木が植わっていたそうです。隣家との境界として植えていたのですね。オンコに限らず庭木は、毎年、その季節になると剪定作業をしてやらねばなりません。でも、お爺さんはいいい歳です。いつまでも出来ない。庭木は伸びて、秋になれば枯葉が隣家の庭に落ちます。

隣家からも枯葉は落ちてきます。そこで、同じ時期に宅地として買って長年隣人として付き合ってきた夫婦に費用を折半して境界線上にブロック塀を造らないか、と相談をもちかけたのですよ。昔のことです。そうしよう、と話はすんなりまとまっていたのですよ。この高さの塀であれば、互いに庭木の枯れ葉も入ってきませんしね。そうそう、この土地を更地にするとき、大きな栗の木があったでしょ。毎年、秋になると、わが家の庭にも栗の実のみならず、枯れ葉が落ちてきましたよ。でも、お互いさまですから、文句を言い合ったことはありません。ですから、塀を造ることは、互いにメリットがあったんです。ほんと、人情味のあるいい時代だったのですね」

そう言い終ると、私は視線を遠くにしてから、ちらっと鈴木を見ると、すっかり話に聞き入っているふうだった。

私は、さらに続けた。

「二人はブロックを積む作業を率先して手伝ったそうです。いや、手伝う理由がありましたから。もちろん、職人の日当を節約するなんて理由じゃないですよ。さっき、話しましたよね。もう、お解かりでしょ。(ボケ面をした鈴木を見て) えっ。解かりませんか? ここに埋めたのですよ。いいですか。このブロック塀はこの二軒の敷地の境界線上にあります。壊すときには両家の承諾が必要です。ましてや壊す頃には年数も経って、所有権に関わるややこしい権利、義務関係が発生しますよ。簡単には壊せません。そう、だから、鈴木さんでしたっけ、その手続きで、今、ここにいて私のこの話を聞いているのですよね」

私は、ここで一度、話を中断した。

「じゃ、このブロック塀のどこかに現金が埋め込まれていたと……」

鈴木は信じがたいという目をして、確認をする声音で訊いてきた。

「そうです。話を戻しますね。ここだけ壊れてるでしょ」

「はあ、……じゃあ」

「そうです。ここに昭和五十年発行の万札、聖徳太子が五〇〇枚、弁当箱ほどのジュラルミンケースに入れて、埋めてあったのです。厚さにしてこんなものですかね」

私は右手の親指と人差し指で大文字のしるしを作って示してから、続けた。

「ご存知でしょ。一つのブロックの中はちょうどいい大きさの空洞になっていきます。蓋をするように、別のブロックを乗せてセメントで固めれば、完璧な金庫になります(私は、上蓋を持ち上げて、空洞のあることを確認させた)」

「ほお」

鈴木は空洞を覗き込み、感嘆の声を洩らした。

「それを放蕩息子が持つて行ってしまったのです」

私は秘密を一気に暴露した。

「どうして、ここに現金を埋めたことを知ったのですかね」

一瞬、びっくりした表情をしたが、そう訊いてくる鈴木の目はどこか輝いていて、その声は興味津々というふうだった。

「簡単ですよ。もう死んでいませんが、右隣のオヤジが見てたんですよ、埋め込む作業をしているところを。それが金だったことまでは知らなかったでしょうが、臭覚ってやつですよ。とにかく見てたんです。実を言うとですね。私がこの土地を買うとき、難癖をつけてきたのは、そのオヤジだけでした。自分がそのうち買ってやるとお爺さんに伝えてあったのに、と悔しがることしきりでしたよ。ですから、いざ家を建てるとなると、そりゃ、もう大変でしたよ。車庫は右隣の端に作れとか、家はもっと奥に建てろとか、自分家の庭に陽が当たらないという文句ですよ。三十歳を過ぎたばかりの私、若造がこの広い土地を

買ったことへのやっかみだとはかり思っていました。そうではなかったようです。本心はここに埋められていた金欲しさからだったようです。家を建て、住み始めても家ごと売ってくれ、とせがまれました。勝手に、このブロックを壊すわけにはいきませんから。買って、自分の物にしてから……と考えたのです。でも、それが叶わなかった。舞い戻って来た放蕩息子に耳打ちして、面倒を起こしてやろうと企んだでしょう。人は他人の不幸を楽しむ性癖がありますから。嫌ですね」

私は意図して口の端をニツとして見せた。

「なるほど。でも、放蕩息子が現金を持って逃げたわけだから、もう……」

その言葉が終わらないうちに、私は鈴木を凝視し、しばらく間をとった。

「鈴木さん、もうないと言いたいのですね。これで話が終わるのであれば、何もこんなに時間をとらせませんよ。いいですか。資産家ですよ。三代にわたって、銀行の支店長をされた方々ですよ」

「では、まっ、まだ、あると？」

鈴木は目ん玉がこぼれ落ちそうなくらい目を見開いていた。

「そう。数千万円がブロック塀のどこかに、土台を含めて……埋められています」

「数千万円!?」

「そう。あら、声が大きくなりましたねえ。金に反応するなんて……不動産屋の営業マンをしていれば、数千万円の現金なんてしょっちゅう見るでしょ」

「はあ、まあ」

顔を歪めて鈴木は明らかに笑おうと努力しているのが見てとれた。

「でも、あなたが心配することはないですよ。この契約書によって、このブロック塀の所有権と処分権は私のものになりましたから。たとえ、新しい住人がここに住み始めても私の許可なくして、この塀を壊すことはできませんから。器物損壊罪で提訴することもできます。そのための契約書ですからね。そういう意味で、あなたは今回、実にいい仲介をしてくれました。感謝してますよ……」

淀みなくしゃべる私の話の腰を折り、鈴木は詰問する口調で訊いてきた。

「しかし、なぜ、あなたがこの事実を知っているのですか？」

「ああ、申し遅れました。私は、当時、某教育機関に勤務しておりました。この土地はさっきから話している孫娘から直接、買ったのですよ。この町内はJR駅から徒歩七分、小中学校やスーパーも近くにあり、静かですから、子供を育てるにも、私の仕事をするにも何か都合がいいのですよ。それに、住んでいる住民も公務員や学校の教員が多いので、治安は抜群にいいですよ。皆さん。性格も温和です」

「そうです。ですから、この地域の空き地はすぐに買い手が見つきます」

鈴木は目尻に笑みを浮かべて答えた。

「でしょう。で、これまでの話は孫娘から聞かされたものです」

鈴木は「なるほど」と小さく呟いた。

「すべての相続手続きを終えて、お爺さんは亡くなったそうです。また、私がこの土地を買うとき、孫娘は入院中で、その余命も一年足らずと聞かされました。まだまだうんとお若いのに、難病を患っていました。生きていうちにこの土地を誰かに買ってもらって、住んでほしかったそうです。売る条件は庭木、庭石、畑、このブロック塀のすべてを残すことでした。私は木々の手入れや畑仕事が好きなものから、孫娘に話すと、大層、感激してくれました。即、買ってくださ

い、と頼まりましたよ。でも、この地域の地価は高いですよ。不動産屋なら、詳しいでしょ」

そう言って、私は鈴木木の顔を見た。

鈴木木は、コクンと頭を下げて、そのとおり、と応えた。

私は、さらに続けた。

「仕事柄、私も世間一般よりも高給をもらっていました。いわゆる三高でした。高学歴、高収入、高身長。いや身長だけは標準かな。フッフッフ。四人いる子供たちも東京の大学へ進学させましたよ。この土地代もキャッシュで払いました。私の社会的な地位が孫娘に安心感を与えたのでしょうか。土地の権利書と現金を交換する前に、孫娘はたっぷり半日かけて、病室のベッドの上でご自分の生涯とこのブロック塀の秘密を語ってくれました。これについては、そのうち小説にするつもりです。はい。私、退職後はペンネームで小説を書いています。これはノンフィクションとして、おもしろいテーマですから。孫娘との会話は、私にとっては小説を書くための取材にもなりましたよ。一石二鳥というやつです。書くことは彼女からも承諾をいただきました。でも、欲を言えば、もう一つドラマがあると、もっとおもしろく書けるのですがね。フッフッフ」

私は思わせぶりで鈴木木の顔を窺った。

それに気づくことなく、鈴木木はチラチラ塀を見ていた。

「孫娘は、別れ際に、言ってましたよ。どうか、数千万円は社会のために使ってほしいと。できれば、自然環境を守るために使ってくれ、とね。私は、どうしてですか？ と尋ねました。すると、なんて優しい方なのでしょうかねえ、ブロック塀を造る前にあったオンコの木たちをユニボで無残にも根こそぎ引き抜いてしまったことを後悔しているとおっしゃったんです。人間のエゴによって、祖父が大切にしてきた

オンコを無理やり抜いて人造のコンクリートで固めたわけですから。屋敷内にある物は木であれ、石であれ、雑草であれ、ましてやこのブロック塀も自分たちの人生を一部始終見てきたとおっしゃってましたよ。人はそんな物にも魂を感じ、生かされているとおっしゃって、ほんと、心根の優しい女性でした。私は、ブロック塀を壊すことがあれば、必ず、その金を森林保護のために活用します、と握手をして約束しました。それを彼女からの遺言として、実行してあげたいのですよ。数千万円ですよ。どれだけの森林が保護できることか。数千万円。解かりますか？ 数千万円、数千万円ですよ。生きるこの目的が金儲けだけという妄想に取り憑かれている人間どもがわんさというこの時代に、なんて立派な考え、信念をお持ちなことか。ああ、そうです。今では、お持ちだったと過去形になります。彼女は亡くなりましたから」

そう言うてから、私は視線を空に向けた。

鈴木木は、私が話す孫娘には興味はないようで、さらに真剣な眼差しになり、訊いてきた。

「さきほどの放蕩息子はどうなりましたか？ また、舞い戻って来て、金を取りに……」

「どうですかねえ。もう、いい歳ですよ。生きてるか、どうか？

どこかで野たれ死したかもしれません。……悪人だから、まだ生きてるかな？ きっと、生きてるかもしれないなあ」

この最後の言葉に反応し、

「生きてますかね？」

と、鈴木木は私の顔を見て強い口調で確認してきた。

「……かも知れません。ああ、そうそう、札幌にいたという風の噂もあったそうです。孫娘も捜索願を出そうとさえ、しなかったそうです。親に縁を切られた男ですから。ちなみに彼女は、残る財産はすべて森

林保護の活動をしているNPO法人に寄付をする手続きをすませてい
る、とも言っていましたよ。私が払った、この土地代も含んでいたそ
うです。独身だった彼女には身寄りはいませんでしたから」

鈴木は、そう話す私の言葉を耳には入れていないようで、何か他の
ことを考えているふうに、あちこちと視線を泳がせてから言った。

「なるほどお。数千万円はここに埋まったままと……」

「そうです。……鈴木さん、目付きが険しくなってきましたね。この
話を疑っているでしょ。信じてもらえませんかよね。こんな爺じいのヨタ
話なんて。そうでしょう、そうでしょう。……まだ、お若いから給料
も安いですよ。でも、しっかり働きなさいよ。この話を決して、他
言したり、夢に見ちゃいけませんよ。夢はいけない、夢だけは見ちゃ
いけない」

「夢? このブロック塀の夢なんて、見るわけないでしょ」

そう言うと、鈴木は怪しげな笑いを洩らした。

「そうですね。それを聞いて安心しました。(腕時計を確認してから)
じゃあ、私はお茶の時刻になりましたので、ああ、そうだ、この書類
を届けてくれたので、もう私には用はないと思いますが、私たち夫婦
は明日から十日ばかり東京の息子の所へ行ってきました。家を留守にし
ます。六人目の孫がピアノのコンクールに出場するものですから、そ
の応援です。孫は目に入れても痛くない、ということを実感してま
すよ。ハツハツハツ。では、これにて失礼します」

鈴木は呆気にとられた顔のまま、私が玄関ドアを開け中へ消えるの
を見とどけた。その後、ブロック塀に沿ってゆっくりと何かを確認す
る鋭い目付をして歩いた。ときどき、立ち止まっては、手で塀をなで
るような仕草をした。

十日後。帰宅すると、

「あら、土台ごときれいに無くなってる?」

女房は狐につままれたような表情をして、声を洩らした。

私は顔を空に向けて、

「ワッハワッハッ!」

と大笑いしてから、ニヤッと笑みをこぼし、

「おもしろい小説が書けそうだ」

と呟つぶやいた。

—— どうでしたか? これは本当にあった話です。フッフッフッ。

次の作品『隠し金』も、ぜひお読みください。

(了)

